

## 豊かなコミュニケーションを図ろうとする子どもの育成をめざした外国語活動・英語学習

### 1 外国語活動・英語科で願う豊かな学びの姿

〔小6〕○今日は英語で買い物をしました。買い物をしながら考えた事は2つあります。1つはジェスチャーが多いこと。指で指したり、手を横に振ったり（違うのサイン）。意外と多かったです。2つ目は、単語で会話が成り立っていることです。「サンキュー」や「グッド！」など、単語で話していることが多くて、これはおどろきでした！（児童A）

〔小6〕○今日は、グループでお店をやりました。となりの人と相談して、よりうまくできるようになりました。1回目は日本語が多くなってしまったけど、2回目は習った単語などを使えたのでよかったです。何よりいろんな言葉が使えるようになったのがよかったです。（児童B）

これは小学6年生の外国語活動のふりかえりである。児童Aは、日本語と比較して英語でのやりとりにはジェスチャーが多く使われることや単語で会話が成立することに気づきを得て、驚きを感じている。また、児童Bのふりかえりからは友だちとの学び合いの中で、より達成感を味わうことができ、言葉で自分の言いたいことを表現できた喜びも感じていることが伺える。このような言葉や文化に対する気づき、他者とのコミュニケーションを通して英語に触れることが楽しいと感じる気持ちは外国語活動の大切な要素であり、言葉に対する思考力を高め、その後の中学校での効果的な文法知識の習得にもつながると考える。

中学校では、外国語活動でのこのような体験を大切に、学びを中学校へとつなげ、外国語活動において音声で理解できていたことを文字として分析的に理解させる。そして文法的なルールに則って思考・判断したことを表現するような言語活動を取り入れて授業展開を行っている。その際、本学校園外国語活動・英語科では「豊かな学びの姿」をただ単に基礎的・基本的な知識や技能が定着している状態を指すのではなく、他者とのかかわり合いを通して、それらを高め合い、探求心をもってさらなる自己の伸長を図る姿をとらえ、以下のように定義し、実践を行っている。

- 友だちとのかかわり合いを大切に、互いの考えや気持ちを伝え、それを尊重しあう姿
- 知的的好奇心や課題意識をもって学び、自己の伸長を図る姿

次に紹介するのは学び合いを通して思考力・判断力・表現力の育成をめざす中学校の授業実践のふりかえりからである。

〔中3〕○なかなか英語だと言いたいことが言えなくて大変でしたが、途切れ途切れでも相手がきちんと理解してくれてとてもうれしかった。（生徒A）

〔中3〕○会話の時にはより相手に伝わりやすい表現を使うと楽しくなりました。（生徒B）

〔中3〕○場面に応じてとなると、普段の筆記ではスラスラ書けるのに、今日は少しとまどいました。頭の中で文章を組み立てるのに若干時間がかかるので、その部分を今後克服したいと思います。（生徒C）

相手に伝わりやすい表現を用いようとしたり、相手の言っていることを理解しようとしたりと相手意識を持ってコミュニケーションを図ろうとする中で、そのためには自分は何をどのように伝えたらいいのだろう、相手の言っていることに対してどのように反応したらいいのだろうという思考・判断の根底となる視点が芽生え始めているのが読み取れる。また、課題意識をもって、自分の苦手な部分を克服しようとする姿も見られ、本部会が願う姿に一步ずつ向かっていることがよくわかる。

## 2 昨年度までの研究の経緯

外国語活動や英語科における思考力・判断力・表現力を以下のようにそれぞれ定義して研究を進めてきた。

思考力：伝えようとする事柄について、文法的なルールに則って考えることができること。  
判断力：場面、状況、相手の表情等に応じて言語材料を選択し、使い分けることができること。  
表現力：思考、判断を通して、場面や状況に応じた最適な方法で相手に伝えることができること。

思考力とは、何か伝えようとする事柄を既習の文法的なルールに当てはめ、そのルールに従って考える力とした。これには、普段からの教師の的確な文法指導とそれによる生徒の文法的理解の定着つまり、基礎・基本の習得が重要となってくる。外国語活動では文法的な指導は行われないので、ここでの文法的なルールとは様々な英語表現やそれらを使う上での約束事を意味している。

次に、判断力とは、思考の段階で出てきたいくつかの単語や表現のリストの中から適切なものを選択し、使い分けることができる力とした。つまり、伝える相手やその場の状況等のさまざまな要因を考慮し、その時点で一番適切であろうと思われる単語や表現を選び出す力である。

最後に、表現力については、思考・判断の段階を通して実際に書いたり、話したりすることによって相手に伝える力とした。しかし、ただ単に言葉を伝えるだけでなく、相手や状況によって、顔の表情や声の大きさ、トーン、身振り手振り、話す態度など自分の意見や気持ちを相手に伝えるときに必要な話し方もこの表現力に含まれると考える。そして思考力・判断力・表現力を11年間のつながりが見えるように以下のように定義した。

初等部前期	遊びや生活の中で体験しながら、自分の願い、思い、考えを確かにもち、それを表す力
初等部後期	相手が伝えようとしていることを、今までに学習した表現や、表情、身振り手振りをもとに考えたり、場面や状況に合わせて、適切な表現を使って相手に伝える力
中 等 部	既習の文法的なルール（または約束事）に則って考え、相手の表情や状況等のさまざまな要因を考慮しながら、最も適切な単語や表現を選択し、書いたり、話したりすることを通して、相手に自分の考えや気持ちを伝える力

本学校園では小学3年から外国語に親しんでおり、初等部前期では外国語活動は行ってはいない。しかし、それぞれの段階での思考力・判断力・表現力のつながりを意識しながら取り組む中で、初等部前期から他とかわる経験を重ね、初等部後期からはそれに加え言葉の面白さや豊かさに気づき、中等部の英語学習ではそれまで触れてきた言語を分析的に理解し、自分の考えや気持ちを表現することの楽しさを味わうことで本部会で願う学びの姿に近づけるのではないかと見えてきた。

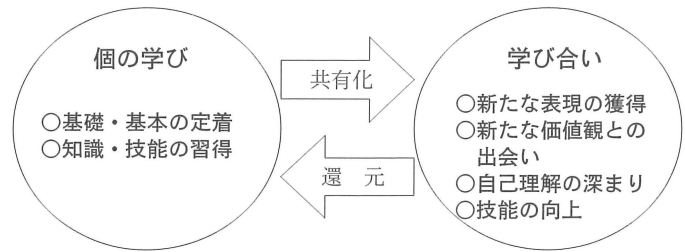
そこで、昨年度はペアやグループから学級全体へとかかわり合いの場面を広げて、友達からヒントをもらったり、友達から学んだ表現や考えを自分のものと結びつけながら、さらに自分の考えや表現を発展させることができるような場面を設定した。教師はこのかかわり合いの主導者となるのではなく、子どもたちの学びをコーディネートするような存在として関わり、学級全体に学びの深まりを与える発言を引き出すよう心がけた。例えば、小学6年生の外国語活動でのかかわり合いの場では「やって見せて」「どうしてその表現を選んだの」などと問い返し、掘り下げることで子どもたちは、自分の英語表現について立ち止まって考え直したり、もっと工夫して表現しようとする姿が見られるなど学びを深めることができた。このような活動を通して、自分なりに工夫して自分の考えを広げたり深めたりしながら思考力を高め、自分で判断して選んだ表現を使って自分の思いを相手に伝える表現力を高めていく姿が見られた。しかし、すべての学習活動にかかわり合いを取り入れさえすれば、子どもたちの思考力・判断力・表現力を高めていくことができるわけではない。学びを深め、広げるためには教材を工夫する必要があると考える。また同時に、11年間の学びのつながりの中でどの時期にどのような言語活動を設定すれば効果的な学習が進むのかを考えていく必要があると考えている。

### 3 本年度の研究

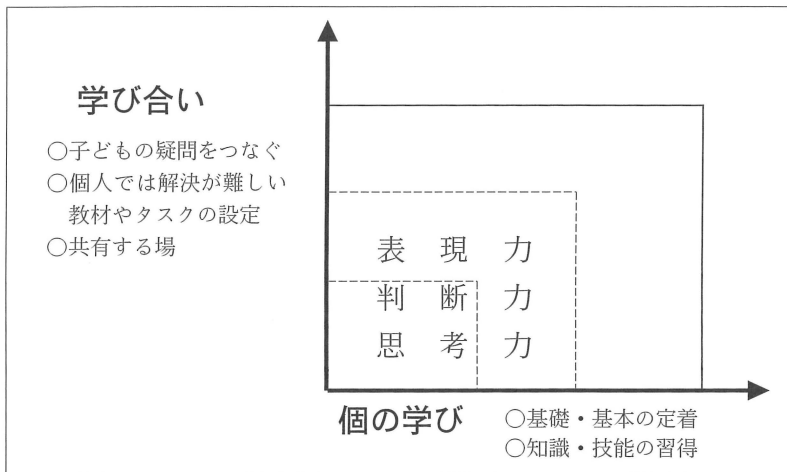
#### (1) 思考力・判断力・表現力を育て高めるための授業づくり

昨年度までの研究で明らかになったことや課題をもとに思考力・判断力・表現力を高めるための授業づくりを考える際に、個の学びと学び合いの関係についても考える必要がある。

右の図は本部会が考える個の学びと学び合いの関係である。個の学びを学び合いで共有し、そこから得たものを個に還元する。そしてこの二つの関係はスパイラル的に高まっていくものととらえている。また、個の学びと学び合いの関係から、思考力・判断力・表現力を図に表すと左下のようになると考えている。

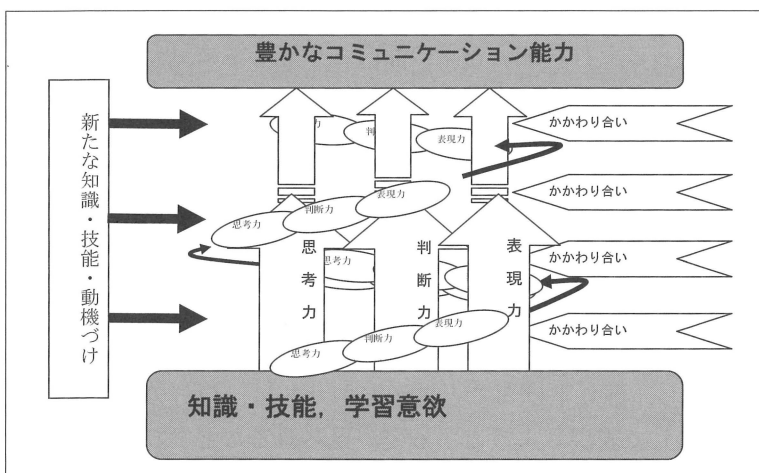


基礎・基本の定着や技能の習得は主に生徒一人ひとりの個の学びによるところが大きいが、ここの部分がしっかりとしていないままかかわり合いの場を設定しても、その知識や技能をうまく活用することができず、集団での学びも深まらない。このような状態では学び合いは成立しない。



学び合いを成立させるためには、本部会で願う豊かな学びの姿でも述べたように、英語でのやり取りの中で、母語である日本語と英語を比べて言語への気づきを得たり、友達と英語でコミュニケーションを図ることが楽しい、自分の思いを伝えられてうれしいと感ずることができるような場の設定や教材の工夫を教師のはたらきかけとして行っていく必要がある。外国語活動では身近な外来語等を使いながら、

学び合いを通して日本語と英語の違いについて児童同士で気づいたことを交換する活動や、友達の考えや思いを受信し、自分の考えと比べながら発信できるような活動の工夫が考えられる。



中学校では基礎的・基本的な知識・技能を活用して思考し、判断したことを表現するような言語活動を設定する必要がある。思考力・判断力・表現力はそれぞれが別々に身につくものではなく、一連の流れの中で育成され、豊かなコミュニケーション能力の育成につながるものであり、このような言語活動により基礎的・基本的な知識・技能を運用へと結びつけることができると本部会では考えているからである。教師が個の学びをとらえ、とらえに応じて教材を工夫する。そして適切なタイミングでかかわり合いの場を仕組んでいくという教師のはたらきかけにより、個の知識・技能の習得が促され、それを共有することで学び合いの質も高まるのではないかと考える。思考・判断したことを表現するような言語活動を日常的に設定して基礎・基本の定着を図り、知識、技能を活用へと結びつける。その土台の上に個の考えや意見をさらに深めることをねらいとした課題解決を指向したかかわり合いの場を設定する。例えば、グループで

学びをとらえ、とらえに応じて教材を工夫する。そして適切なタイミングでかかわり合いの場を仕組んでいくという教師のはたらきかけにより、個の知識・技能の習得が促され、それを共有することで学び合いの質も高まるのではないかと考える。思考・判断したことを表現するような言語活動を日常的に設定して基礎・基本の定着を図り、知識、技能を活用へと結びつける。その土台の上に個の考えや意見をさらに深めることをねらいとした課題解決を指向したかかわり合いの場を設定する。例えば、グループで

現在進行形の運用の規則を見つけるようなかわり合いを現在進行形が新出事項として出てきたタイミングで設定するのではなく、もっと後の段階で設定するのが効果的だと考える。つまり、基本的な文法知識の定着を目ざす段階ではなく、さらなる探究課題を見いだして発展的な学習へと移行する段階で、知的好奇心をそそり、課題意識をもって取り組むことができるようなかわり合いを取り入れるのである。

## (2) 学び合いによる思考力・判断力・表現力の評価

個の学びを学び合いで共有し、学び合いで得たものを個に還元するスパイラルをより有効なものにするためには、教師が個の学びの状態をとらえて言語活動を設定し、それがいかにして個へと還元されたのかを検証する必要がある。そこで、他とのかかわりを大切にしながら思考・判断したことを表現するような言語活動を日々の授業に盛り込み、個の学びをとらえ、探究的な課題を見いだせるような段階で課題解決的なかわり合いを設定して実践する中で、児童、生徒の思考力・判断力・表現力がどのように高まったのかを見とることにした。

小学校の外国語活動については、学び合いによる思考力・判断力・表現力は「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」、「外国語への慣れ親しみ」とその後の学習において、中学校の「外国語表現の能力」、「外国語理解の能力」につながる一部の「言語や文化に関する気づき」に深く関わっている。小学校の外国語活動では数値による評価をするのではなく、「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」、「外国語への慣れ親しみ」、「言語や文化に関する気づき」の評価の観点に即して文章の記述による評価を行うことが適当であると考えている。よって、学び合いの場面での児童の行動や発表を観察し、ふりかえりや作品などから学び合いによって思考力・判断力・表現力がどのように高まったのかを見とって具体的に記述することにした。評価規準は児童の学びをとらえるための手立てとして設定する。

中学校の英語科でめざしている学び合いによる思考力・判断力・表現力は新観点の「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」、「外国語表現の能力」、「外国語理解の能力」に相当すると考えられる。他とのかかわり合いを大切にしながら思考、判断したことを表現するような言語活動を授業に取り入れて実践する中で、単元のはじめと単元の終わりのそれぞれの観点の評価の推移をグラフに表し、そこから子どもの思考力・判断力・表現力がどのように高まったのかを見とることとする。個の学びの状態をとらえ、教師の教材の工夫や場面の構想などはたらきかけありかたを考えることで、個の学びと学び合いのスパイラルを有効にすることができるのではないだろうか。この一連の流れを効果的に行えば、学びを深めていけるのではないかと考えている。

## 4 成果と課題

教師が個の学びをとらえ、とらえに応じて教材を工夫して、思考・判断したことを表現するような言語活動や課題解決を指向したかわり合いを授業に取り入れて実践してきた。個の学びをとらえることで教材を工夫するだけでなく、児童生徒一人ひとりへの声かけや支援が明らかとなりきめ細やかな支援ができた。また、他とのかかわり合いを大切にしながら、思考・判断したことを表現する言語活動を取り入れたことで、子ども自身が自分の思いを伝えることができてうれしい、相手の言っていることが分かってよかったという思いを抱くとともに、この次はこんな風にしてみたいというように次への課題を見つけることができたことも成果である。

課題は「学び合い」による思考力・判断力・表現力の評価に関してである。実践に取り組む中で、思考力・判断力・表現力を育成することができたと言えるが、それが学び合いによる効果であるのかということについては、今後もさらに学び合いを取り入れた授業実践を行い、その評価の在り方についても研究を続けていかなければならないと考えている。

(文責 高田 純子)

### 【参考文献】

- ・松江市英語教育推進委員会、松江市小中一貫基本カリキュラム
- ・斎藤栄二、自己表現力をつける英語の授業、三省堂
- ・東京学芸大学附属小金井中学校、学び合いで輝く・伸びる・高め合う、東洋館出版社